

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370522

研究課題名(和文) 多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究 - 在日パキスタン人を中心に

研究課題名(英文) Language Choice and use among foreigners in a multilingual environment: Focusing on Pakistanis in Japan

研究代表者

福永 由佳 (FUKUNAGA, YUKA)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・研究員

研究者番号：40311146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は在日外国人の言語使用/選択と日本語学習の実態を明らかにすることである。研究対象はパキスタン人コミュニティで、人口は少ないが、社会的に自立したエスニック集団である。本研究では質問紙調査とインタビュー調査を実施した。分析の結果、パキスタン人コミュニティはパキスタンルーツと日本ルーツの2グループから構成されていること、そのいずれも多言語使用者であることがわかった。日本ルーツのグループのメンバーはパキスタン人と結婚した日本人女性であり、彼女らは家庭・宗教の場面で、ウルドゥー語をより用いることが明らかになった。このことは、パキスタン人コミュニティにおけるウルドゥー語の重要性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：This study examines language choice, use, and the state of Japanese-language learning among foreigners in Japan, focusing on Pakistanis. Although small in number, the Pakistani community is an ethnic group that pursues a proactive approach to social activities. The study employed a questionnaire-based survey and conducted interviews to analyze the language preferences of this community. The results show that the Pakistani community consists of two groups—those with Pakistani roots and those with Japanese roots—both of which include multilingual speakers. The group with Japanese roots consisted of Japanese women who had married Pakistani men. The study clarifies that in situations and conditions such as the home and religious environments, the members of the group with Japanese roots spoke Urdu more frequently. This highlights the importance of the Urdu language to the Pakistani community.

研究分野：日本語教育研究、社会言語学

キーワード：在日パキスタン人的調査 量的調査 多言語使用 場面・状況別言語使用 言語使用/選択要因 混合法研究デザイン 質

1. 研究開始当初の背景

グローバル化により、多様な言語共同体や言語接触に無自覚であった日本においても多言語状況が関心を集めている。日本の社会言語学では琉球語やアイヌ語等の地域の言語的多様性には研究の蓄積があるが、外国から移住した移民（以下、外国人）の言語生活に関する研究は緒に就いたばかりである。

そのなかでも、日本語教育の分野では、1980年代に行われた中国帰国者を対象とした生活場面調査を嚆矢とし、中国帰国者定着促進センターやアジア福祉財団難民事業本部等の外国人支援関係機関、国際日本語普及協会等の日本語教育機関、文化庁、国立国語研究所、大学、外国人の集住地がある地方自治体等による調査・研究が存在する。しかし、福永（2017）によると、これらの調査・研究では、外国人の言語使用の実際よりも日本語習得と生活上の問題の把握に力点が置かれている。そのため、調査項目は習得すべき言語としての日本語と外国人学習者の母語の2つの言語の枠組みで設計されており、母語と日本語以外の言語の使用は把握できないという問題がある。

日本の研究動向とは対照的に、欧米では、母語と移住先の優勢言語あるいは第一言語と第二言語といった従来の2分法では捉えきれない現代の言語使用の多様化に対応しようとする動きが社会言語学、応用言語学、バイリンガル教育、第二言語教育において活発化している。

欧米の研究潮流に後塵を拝しながらも、国内の研究では多言語使用者や多言語使用を射程にした研究が取り込まれつつあるが、研究対象の偏り等の課題もあり、より一層の進展が求められている。

<引用文献>

福永由佳、日本語教育における複数言語使用の研究の意義と展望、早稲田日本語教育学、22号、2017、pp.61-80

2. 研究の目的

本研究の目的は、外国人の言語選択/使用を複数言語の枠組みから幅広く捉えることである。具体的には、(1)場面・状況別の多言語使用、(2)多言語使用を支える言語学習、(3)多言語使用/選択に影響を与える要因の3点を明らかにすることを目的とした。

研究の対象としたのは、在日パキスタン人とその家族である。在日パキスタン人は、人口こそ小規模ながら、エスニック・ビジネスや宗教などの社会的な活動を積極的に展開し、日本語と母語以外に複数の言語を駆使しつつ生活を営んでいることが指摘されている（福永2014）。

<引用文献>

福永由佳、在日外国人の多言語使用に対する Ethnolinguistic Vitality Theory の適応可

能性 在日パキスタン人の事例、国立国語研究所論集、8号、2014、pp.33-50

3. 研究の方法

本研究は混合法（クレスウェル・ブラノクラーク2012）にもとづき設計し、量的調査と質的調査を実施した。調査により、量的・質的データを収集し、最終的に2種類のデータを統合し分析した。重層的なデータを用いることにより、多角的な解釈と議論の展開が可能となった。

<引用文献>

J.W.クレスウェル・V.L. ブラノクラーク、人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン、2012、北大路書房

4. 研究成果

(1) 質問紙調査：質問紙調査は予備調査、本調査の2段階で実施した。予備調査は2014年10月に実施し、21名の回答を得た。予備調査の結果をもとに設計した本調査は2017年に実施し、133名の協力を得た（うち有効回答は127名）。予備調査、本調査いずれも関東を中心に複数の場所・地域で実施した。

(2) インタビュー調査：インタビュー調査は、質問紙調査（本調査）と並行して実施した。属性等のバランスを考慮し選択した14名を対象とした。

(3) 分析結果：参与観察および文献研究によると、在日パキスタン人コミュニティは大きくパキスタンにルーツのあるグループ（以下「パキスタン人」と日本人配偶者等の日本にルーツのあるグループ（「日本人」）から構成される。その構成に従い、本研究でもコミュニティ全体、パキスタン人、日本人に分けて分析を行った。

母国において複数の言語と接触経験があり、複数の言語を使用してきたパキスタン人に対し、言語状況が大きく異なる日本で育った日本人は母語や母語以外に使用できる言語に関する多様性は低い。母語以外にできる言語については、パキスタン人回答では15種類の言語がみられたが、日本人回答は7言語に留まった。パキスタン人回答では、国家語のウルドゥー語、パキスタン国内の地域諸語（パンジャービー語など）、宗教語のアラビア語、ウルドゥー語と言語的な類似度が高いヒンディー語、パキスタンにおいて社会的経済的価値の高い言語と評価される英語に加え、日本への移住を契機に習得された日本語やロシア語も挙げられた。

日本人が母語以外にできると答えた言語は合計で7言語であったが、大きくウルドゥー語と英語に二分された。そして、日本人全体の約7割が母語とそれ以外の言語を操ることができる、すなわち多言語能力者であると

自らを評価した(福永 2018)。さらに、日本人は家庭や宗教等の場面においてウルドゥー語をより使用する傾向が見られた。これらの結果から、パキスタン人コミュニティの成員としての日本人が有する多言語レパートリーにおいて、ウルドゥー語は重要な資源であると考えられる。英語に比べ、ウルドゥー語は日本国内で学ぶ機会や場所が非常に限られる言語であり、日常的に使用できる程度まで習得されるには高い動機が求められる。コミュニティでウルドゥー語が重視され、ウルドゥー語使用者になることによって、コミュニティに十全な参加が可能になるという事情が学習を支える動機として考えられるが、今後さらなる検証が必要である。

その一方で、家庭領域では、日本人は子どもとパキスタン人配偶者に対しても母語(日本語)を多用しているという結果が得られた。このことから配偶者であるパキスタン人男性は少なくとも日本人配偶者と日本語でコミュニケーションが可能な程度の日本語口頭能力を有していると言えるだろう。

コミュニティの成員別の分析により、パキスタン人だけではなく、日本人も多言語使用の当事者であることが示唆された。これは、従来の多言語使用に関する研究や社会通念として考えられてきた「多言語使用者は外国人である」という暗黙の前提に再考を迫る結果だと言える。

<引用文献>

福永由佳、パキスタン人コミュニティの多言語使用 移民コミュニティの成員としてのパキスタン人と日本人に着目して、シンポジウム「顕在化する多言語社会日本」予稿集、2018、pp.39-46

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

福永由佳、日本語教育における複数言語使用の研究の意義と展望、早稲田日本語教育学、査読有、22号、2017、pp.61-80
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=38278&item_no=1&attribute_id=162&file_no=1

福永由佳、“パキスタンストリート”の言語景観 自律、排除、そして共存、ことばと社会、査読有、18号、2016、pp.143-151

[学会発表](計7件)

福永由佳、パキスタン人コミュニティの多言語使用 移民コミュニティの成員としてのパキスタン人と日本人に着目して、シンポジウム「顕在化する多言語社会日本」、2018年3月
福永由佳、日本語学習リソースとしての

家族についての一考察 在日パキスタン人の事例から、第10回日本語実用言語学国際会議、2017年7月

福永由佳、多言語使用者の言語管理 「母語」を中心に、言語管理研究会、2016年12月

福永由佳、多言語使用者としての在日外国人の言語生活の多様性、NINJAL国際シンポジウム、2016年1月

福永由佳、母語に対する評価の諸相 在日パキスタン人の言語使用意識調査を手がかりに、『評価』を持って街に出よう」出版記念シンポジウム、2016年1月

福永由佳、在日パキスタン人コミュニティにおける言語生活 富山県射水市の事例を中心に、多言語現象研究会第56回研究会、2015年3月

福永由佳、移民としての在日外国人の言語レパートリー 在日パキスタン人の多言語使用の事例から、国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム、2015年1月

[図書](計1件)

福永由佳他(宇佐美洋編)、くろしお出版、「評価」を持って街に出よう —「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて、2015、19章(pp.322-335)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/view/tagengo/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

6. 研究組織

(1)研究代表者

福永 由佳 (FUKUNAGA, Yuka)
国立国語研究所・日本語教育研究領域・研究員
研究者番号：40311146

(2)研究分担者
()研究者番号：

(3)連携研究者
()研究者番号：

(4)研究協力者
()